九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

孫楚試論 ： その反金人銘の制作意圖について

石，其琳
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/9710

出版情報：中国文学論集. 18, pp.1-29, 1989-12-31. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

孫楚試論

――その反金人銘の制作意圖について――

石　其琳

孫楚に關して、現在まで專門的な研究はなされていない。孫楚の事蹟のうち、もっとも知られているのは『世說新語』の「漱石枕流」の故事である。(1) すなわち孫楚は若い頃、隱遁の志があった。友人王濟に「石に枕し、流れに漱ぐ」と言おうと思いながら、誤って「石に漱ぎ、流れに枕す」といってしまった。そこで王濟がからかった。「流れを枕にしたり、石に漱いだりすることができるだろうか」。すると、孫楚は「流れを枕にするのは、耳を洗うためだ。石に漱ぐのは、齒をみがくためだ」と答えた。これは『晉書』孫楚本傳中(2)の記事によっても知ることがきる。この故事によって、孫楚の性格とその人間像のかなりの部分を窺うことができるであろう。

「枕流漱石」については、錢鍾書氏の『管錐篇』に、孫楚のこの言葉について「孤標獨造、莫爲之先而復罕爲之後也」(3)と言う評語がある。近代日本の小說家夏目漱石の「漱石」は筆名であるけれども、その由來がこの語「石に漱ぎ、流れに枕す」にあることは、漱石の漢文に對する素養の深さとともに、遍く人々の知るところであろう。更

に、夏目がこの筆名を使った理由としては「頑固者、變物」[4]の意味、隱者の風貌であったことは想像できよう。ところで、これらの故事に浮評される孫楚とは、一體どのような人物だったのであろうか。

この小論は、孫楚についての初歩的な檢討を目的としたものであり、楚の作品を通じて、その時代と文人の思想傾向、更に政治、文學發展の關係について考察してみたい。

一

作品の檢討に入る前に、孫楚の生きた時代を理解しつつ、孫楚の生涯を考察してみたい。

孫楚の生年については、現在までのところ確定されていない。『晉書』本傳の記載に依ると、晉惠帝元康三年（二九三）に去世していることは知り得る。近人の資料によると、二二〇年[5]と二四〇年[6]の二つの生年說があるが、孫楚に關する資料の少なさもあり、確實な生年を特定することはできない。そこで『晉書』本傳及び其の他の資料から、おおかたの生年を想定してみたい。

『晉書』本傳の始めの部分は、次のように述べている。

孫楚字子荆，太原中都人也。祖資，魏驃騎將軍。父宏，南陽太守。楚才藻卓絶，爽邁不群，多所陵傲，缺鄉曲之譽。年四十餘，始參鎭東軍事。

右の文中の「年四十餘、始參鎭東軍事」の「參鎭東軍事」とは鎭東將軍下の參事をしたことを示すものである。本傳より推定すれば、この鎭東將軍とは石苞[7]を指す。孫楚の作品中には極めて有名な勸降文「孫子荆爲石仲容與孫皓

書」がある。この文は『文選』に收められ、[8]同時に孫楚本傳中にも見える。また本傳中の記載には

文帝遣符劭，孫郁[9]使吳，將軍石苞令楚作書遺孫皓。

とあり、文帝のこの行事は、『三國志』の吳皓傳の記錄に依ると、孫皓[10]自立後の魏咸熙元年（二六四）の出來事である。また『晉書』文帝傳及び『資治通鑑』によれば、咸熙元年十月にあたる。[11]これはまさに石苞が鎭東將軍を拜した年にあたり、[12]まもなく功あった石苞は征東大將軍の位を授けられ、つづいて驃騎將軍にも升った。孫楚傳によれば、孫楚が石苞のために書いた勸降書は、當時使用されなかったという事實がある。また「楚後遷佐著作郎、復參石苞驃騎軍事」の記錄がある。このことは正に石苞の履歷と符合する。これは、孫楚が石苞の幕下で鎭東軍事であった頃の事であり、咸熙元年の事、すなわち傳記が言うように、この時すでに四十余才であったはずであろう。從って、これより推定すれば、孫楚の生年は魏文帝黃初年間、つまり少なくとも二二四年以前といえるであろうし、また七十余才まで生きたことは確定できる。

次に、孫楚の出身背景について檢討してみたい。本傳に「祖資，魏驃騎將軍」とあることから見れば、楚の祖父孫資（？―二五一）の生年もまた不明であり、その卒年は『三國志』中の資の傳記[13]によれば、嘉平三年になっている。資は魏の武帝、文帝、明帝の三代に仕え、曾て曹操幕下の重臣荀彧の極めて高い評價を受けている。[14]文帝時には重要機密をあつかう職位にあり、[15]明帝時に至っては更に寵を得ている。[16]正始時代の齊王卽位後、官位は「右光祿大夫」「金印紫綬儀同三司」に昇り、更には衞將軍、驃騎將軍にも任じられている。[17]資の本傳の裴松之注には資に對する辛辣な評語が見える。[18]されば、資が高い官歷をもった人物であり、魏室の存亡にかかわったことは疑う餘地も

ないであろう。[19] 楚の父親弘は、南陽太守であったけれども、官歴は至って平坦であり、詳しく考察することはできない。

このように見てくれば、孫楚が官僚家庭に生まれ、特に祖父資の在世中にあっては恵まれた家庭環境に育ったことは十分に想像できる。

孫楚の作品に關しては、すでにその全貌を見ることはできない。現存するもっとも完備された資料は『全晋文』に收められた作品である。楚の傳については、『晋書』の列傳に見ることができるが、『晋書』には文苑、隱逸、儒林等の項目が設けられているものの、楚の傳記は、どの項目にも入ってはいない。その他の主要な資料の一つとして、『世說新語』がある。『世說』には楚の文學作品の一つをとりあげている。記事の內容は、次のようである。孫楚は妻の喪があけると、詩を作って王濟に見せた。すると、王濟は次のように稱贊している。

未知文生於情？情生於文？覽之悽然，增伉儷之重。

この詩の本文は、『世說』の劉孝標の注に引かれている。[20] ほかに、楚の性格を描寫した記事はそれぞれ「言語篇」、「排調篇」、「傷逝篇」に見える。その內、「排調篇」の記事は、すでに紹介したとおりの「枕流漱石」のことである。「言語篇」は、楚が當時の代表的貴族の一人であった友人王濟とそれぞれ自分の土地や人物のよさを言いあった故事である。楚は自分の故郷にたいして誇りを持って次のように語った。

其山崔嵬以嵯峨，其水泮渫而揚波，其人磊砢而英多。

また、「傷逝篇」の記事は以下のようである。めったに人に敬服することがなかった孫楚が、王濟だけは尊敬し

ていた。王濟の葬式におくれてやってきた孫楚は、棺の前で慟哭し、賓客たちも涙をさそわれ、泣かないものはいなかった。この葬式に、當時の名士たちはことごとく參加した。彼は、哭の禮を終えると、靈前に向かっていった。「卿常好我作驢鳴，今我爲卿作。」そして、その鳴き聲は本物そっくりだった。賓客たちは皆笑った。そのとき孫楚は頭をあげて「使君輩存，令此人死。」といった。當時において、驢馬の鳴き聲をまねすることは、禮教に反して、老莊思想をあらわす表現とされている。そして三國時代の王粲（一七七―二一七）も孫楚とおなじ驢馬の鳴き聲の名人であることは、よく知られている。[21]

單に『世說』が收錄した孫楚のエピソードから見ても、楚には隱逸の志があったことを知り得る。本傳が言うところの「楚才藻卓絕，爽邁不群，多所陵傲，缺鄉曲之譽」、「子荆超俗」であり、また自稱「狂夫」[22]である彼の行跡を見れば、楚は極めて隱者の氣質に富み、仕宦にふさわしくない性格を持っていると思われる。しかしながら、楚は實際は積極的な現實論者であり、官運に惠まれなかったとはいっても、それは性格的理由だけに起因するのではなく、漢末から魏晉に於ける社會政治各方面に及ぶ背景があった事を考慮せねばならない。

前述した通り、孫楚の一生は、魏の文帝末期から明帝の政權、齊王正始年間を經過しており、元帝咸熙のあと、王朝の交替、司馬氏の政權である西晉時代を目睹したはずである。推察すれば、この西晉時代は、楚の年齡から見ても、政治に關與し始めたばかりの時期である。晉が吳を滅ぼし、天下の統一を完成させてから、太康年間の始まりであるこの時期から楚の去世までは、政治的には小康狀態であったと思われる。

以上が楚の生きた時代の政權交替の大筋であるが、文化史的には、正に建安から太康まで、特に建安、正始、太

康は文學史上においても變化に富んだ重要な時期であった。建安七子の風度、竹林七賢の交遊は、その直後に生きた楚にとっても、記憶に新しいものだったであろう。嵇康の被殺と阮籍の死は、中國哲學（美學を含む）、文學史上重要な意味をもつ正始時代の終結であった。政治上の九品中正制度の導入は、社會全體の體勢や、これまでの君臣、父子、貴族に於ける縱横支配の關係に、根底をゆるがす大きな變化を與えた。そして、文學藝術に於いても、政治社會の變化に從って、豐富な成果をもたらしたのである。

このように建安から太康に至る時代は楚の生涯にとって多樣な時代であったが、その中で特に重要なのは、楚の主な政治活動が西晉の建國のすこし前から太康、元康に及んでいることである。この時期は、經濟史上においても短いながら一つの繁榮期であった。(23)

『文心雕龍』の時序篇に言う。

孫摯成公之屬，並結藻清英，流韻綺靡，前史以爲運涉季世，人未盡才，誠哉斯談，可爲歎息。

これは楚の時代背景に言及して、その才の不遇を惜しみ嘆息しているものである。いったい、これらの人々の心境は如何なるものだったのであろうか。彼等が直面した各種の現實問題は、彼等にどのような對應を强いたのであろうか。このような問題を理解するために、楚の作品は我々にとって考察の爲の好材料となり得る。以下、孫楚の個別の作品について、檢討を進めて見たい。

二

孫楚の作品について、前述したように、その全容はすでに見ることはできない。『全晉文』に收められたものが今日傳存する最も完備した資料である。

楚の文學作品は、歷代の文學批評上に於いて、それ相應の評價の對象になっている。『詩品』は彼を中品に列して、次のように評している。[24]

子荆零雨之外，正長朔風之後，雖有累札，良亦無聞。（中略）……並得虬龍片甲，鳳凰一毛。

この「零雨」とは、送別を容內とした詩であるけれども、詩中の「零雨被秋草」句が特別な稱讚を受けるところとなり、後にはこの句がこの詩を代表するようになった。この詩は『文選』にも收められ、[26]沈約の『宋書』謝靈運傳論には、次のような文が見える。

子荆零雨之章，正長朔風之句，並直擧胸情，非傍詩史。

これによれば、當時において、楚の作品がすでに相當に人口に膾炙されていたことが理解できる。その作品が高い評價を受けた理由として、清代の何義門『義門讀書記』[27]に

時方貴老莊，而見之于詩，亦爲創變，故擧世推高。子荆魏孫資之孫，骨力甚健，與後來孫許不同。[28]

という評語を見ることができる。また沈德潛『古詩源』も

送別詩以齊物作主，古人用意，不專粘着，此亦一體。

と言っている。[29] つまり、これらの批評の着眼點は、詩體內容の異變にあり、送別の詩に說理の趣を加味したところにある。言葉を換えれば、玄言詩風を帶びた味を指すものである。この種の表現方式は、送別詩の詩體に於いて、始めてであり、また楚のオリジナルでもあった。同時に、それは當時の社會風氣、老莊思想の隆盛の中にあって、極めて高い評價を受けたであろう。このような理由からすれば、明人張溥に

　子荆零雨，正長朔風，稱于詩家，今亦未見其絕倫也。[30]

という見解があってもおかしくない。

『藝文類聚』は、この詩の抒情部分だけを摘錄して、楚の說理の句を全く取り上げていない。[31] この說理の精神は、魏晉の文人に普遍に見られる心情であるし、後に偏向して極端な發展をみた玄言詩が獨占した文壇の情況を反映している。楚の孫である孫綽は、[32] 有名な玄言詩の大家であったこともここで注意しておいてよい。

この餞別のために書いた小詩において、作者の描寫手法は、單純な感性から發し、理性の展開にまで推し進めている。これはそのまま後世の批評家に贊否兩論の評價を生じさせる主因であった。創作態度から見れば、抒情と理趣が作品の中でバランスをとることによって、作品の世界が異なる方向に展開していくことをあらわしている。孫楚の時代は思想史的に見て、正に玄學の芽生の時期であったことを留意せねばならない。玄學と儒學の最大の相違點は、「人的覺醒」[33] の重要意義を强調するところにあるであろう。これは、正始時代以來顯著な時風の特色でもある。

「送別」とは、もともと個人對個人の感情の發露であろうが、この詩においては、說理の表現の部分があり、玄學家の常用術語を用いて解釋するならば、實際上作者が追求するものは、內在の「心」の反映である。これは現實

の「跡」の世界と共存できるものであり、「心」と「跡」の合一によって、はじめて構成される個人の完成された心境であろう。ここは、一方に漢代の儒家の中心思想を繼承し、一方では魏晋の老莊思想を包容するもので、兩者間に介在する一種の過渡時期に於ける人生宇宙觀である。要するに、新學、舊學の[34]間に存在する發想であると言える。

楚はこの詩に漢人の作品の文句を出典としてつかいこなし、自然に魏晋の時代の情緒を出している[35]。言いかえれば、外在する有限の現實世界の追求から、內在する無限の精神世界に深入するという摸索である。これは單なる文學發想ないし修辭の問題であるとは思えない。正に「文變染乎世情」[36]というように、この時期に於ける政治、社會、道德の變化に對して、文人たち自己の人生哲學にも强く響くものがあったと考えられる。これらの事實を理解しようとするなら、まず楚の作品「反金人銘」を讀解する必要がある。

三

この「反金人銘」は、表面的には、單なる「金人銘」に對して提出したところの反論にすぎない。しかし、內容は楚個人の處世態度を暗示するのみではなく、當時の政治制度、文人思想動向、社會風氣等各方面の現實問題をも反映している。

いま見られる「反金人銘」は、『藝文類聚』、『全晋文』などの資料[37]によるものである。

「金人銘」とは、もともと來歷の明白なものであり、『說苑』敬愼篇[38]には次のような記錄が見られる。

孔子之周，觀於太廟右陛之前，有金人焉。三緘其口而銘其背曰，古之愼言人也。戒之哉！戒之哉！無多言，多

口多敗，無多事，多事多患，（中略）……執雌持下，莫能與之爭者，人皆趨彼，我獨守此，衆人惑惑，我獨不從，內藏我知，不與人論技，我雖尊高，人莫害我，（中略）……天道無親，常與善人。戒之哉！戒之哉！孔子顧謂弟子曰，記之，此言雖鄙而中事情，詩曰：戰戰兢兢，如臨深淵，如履薄氷，行身如此，豈以口遇禍哉。

「金人銘」の主旨は、篇名が示すように、言行なり態度が敬愼であれば、失誤を招くことがないということである。當然、この銘が成った時期には、それだけの時代背景があったはずである。後人のこの文に對する見解、すなわち文章をもって反對意見を述べた最初の人物は決して孫楚ではなく、三國時代の王粲である。また、この事實は、楚を理解する上で、極めて重要な意義を持っている。

王粲には「反金人贊」という作品がある。(39) 內容は、次のようである。

君子亮直，行不柔群，友賤不恥，誨焉是益，我能發蹤，彼用遠跡。一言之賜，過乎璵璧，末世不敦，義與玆易，而言匪忠，退有其謫。

この「反金人贊」の制作時期については、現在すでに考定することはできない。內容を讀むと、その中の一句「一言之賜、過乎璵璧」から、この文の主旨を知ることができる。「言論」の重要性を明らかにするには、「言論」の政治諷諫に對しての强調と、「金人銘」で主張するところの「少言」、「少事」という相反する主張とがある。表面から見れば、孫楚の作も含めて、二篇の反金人銘の文章は、あたかも言論の問題だけに言及しているようにみうけられる。しかし、一步深めてみれば、實際上、哲理を言わんと欲していることが窺い知られる。言論を强調しながら、その處世態度を表明するには、文學の功用價値觀の問題まで言及する必要があろう。

ここでまず「金人銘」の原文の内容を検討してみたい。本文の主旨についてはすでに述べたが、ここでは「衆人惑惑」から「人莫害我」までの部分の意味を見てみたい。この句が意味するのは、一種の愼言から消極的な保身思想に發展させるものであり、一歩進めて言うならば、亂世に於ける一種の「明哲保身」の哲學であるといえよう。この考え方は、楚の生きた時代の思想背景と極めて接近し、楚が反論の文を書いた目的というのも、畢竟ここにあるということができる。

つづいて楚の「反金人銘」の本文を検討してみたい。この文は、いくつかの段落に分けることができ、各部分に含む寓意が楚とその時代を理解する上で極めて重要な意味をもつ。

さて、本文の題目が言うように「反」金人銘であるから、始めから反意の字句が見えている。例えば、本文冒頭の部分に「金人銘」では晋太廟「右」階としているのを、「左」に、また「三緘其口」としているのを、「大張其口」とし、「我古之愼言人也」を「我古之多言人也」、「無多言、多口多敗、無多事、多事多患」を「無少言、無少事、少言少事、則後生何述焉」とそれぞれ改めている。このいくつかの事例からみれば、この作品が主張したいのは、一種の「金人銘」と全く相反する人生態度である。

以下に、第一段落の内容を見てみたい。文の内容は、冒頭部分の説明をも含めて、以下のようである。

晋太廟左陛之前，有石人焉，大張其口，而書其胸曰：我古之多言人也，無少言，無少事，少言少事，則後生何述焉。我讀三墳五典，八索九丘，頤罔深而不探，理無奥而不鉤，故言滿天下而無口尤。(40)

右の文はつまり知識人に於いては，深い學術修養を基礎に持つ必要がある、ということである。これは「言滿天下」

にして、「無口尤」の境地に達することであろう。しかし、現實の社會に於いては、そう簡單ではないのである。よって、楚が次のところの「胡爲塊然，生鉗其口」に於いて提出した疑問が生じるのである。次の段落は以下のようである。

夫唯言立，[41] 乃可長久。胡爲塊然，生鉗其口，自拘廣庭，終身叉手。[41]

これは、漢から魏晋を含む六朝を通じて、儒學の衰弱による文學發展に與えた影響とかかわる問題であろう。[42] そして、「立言」とは、曹丕の典論以來、文學の功用に對する最も高い評價であると考えられる。だが、現實的要請から、知識人たちは「生鉗其口」、「終身叉手」という態度をとらなければならないことは、かかる六朝期に特異な隱逸觀をあらわしていると考えられよう。[43]

さらに、

凡夫貪財，烈士殉名。盜跖爲濁，夷柳爲清。鮑肆爲臭，蘭圃爲馨。莫貴澄清，莫賤滓穢。二者言異，歸于一會。

ここでは、士大夫にあるべき處世態度について、說明を加えている。つまり、士大夫とは、積極的に天下を清める大志があるべきであり、もともと彼らが現世に對するあり方でもあった。惜しむべきは、世事と願いは、よくよく相反するものであり、政治家の修養と政策が士大夫の意志を支配するばかりでなく、行爲や動向にまでもかかわることであろう。この問題については、次の部分で述べている。

堯懸諫鼓，舜立謗木。聽采風謠，惟日不足。道潤群生，化隆比屋。末葉陵遲，禮敎彌衰。

ここでは、盛世と衰世に於ける執政者個人の修養と民に對する敎化方式の相違を述べている。そして、ここの要點

は、言論の諷諫功用である。また、執政者個人の修養による差異がどのような結果を生ずるのかは、次の部分で説明している。すなわち

承旨則順，忤意則違。時好細腰，宮中皆飢，時悅廣額，下作細眉。逆龍之鱗，必陷斯機。括囊無咎，乃免誅夷。顚覆厥德，可爲傷悲。

右の内容が表現しているところの虛僞不實の社會風氣は、士人たちにとっても嘆かわしい實態であった。

つづいて最後の部分である。

斯可用戒，無妄之時。假說周廟，于言爲蚩。是以君子，追而正之。

この部分は、作者自らの自嘲の詞である。全體から見れば、この時代に於ける深刻な弊害を強調し、それを批判することによって、自己の處世態度を表明していると考えられる。

楚は、本文に於いて、文人が相對する幾つかの大きな問題について言及している。初めに楚が提出しているのは、文人の仕、隱に對する自己選擇の問題である。これは漢末から魏晉以來、文人にとって最も頭を惱ませる問題であつた。表面的に見るなら、これな單なる政治的な問題といえる。しかし、「かくの如く隱遁思想は中國文學の重要なる要素であってこの要素を除却しならば其の滋味と生彩とを失うて何の魅力もなき乾燥無味となりうるであろう」と橋本循氏が指摘しているように[44]、文學の發展に關係する重要な鍵になり得る問題であった。

魏晉時代の特殊な歷史條件下では、政治的な大志があっても、才能を發揮することはできない。知識人はそういった精神上の要求を道家の老莊世界に求め、老莊世界に於いて、儒家思想の「獨善其身」とは違う、精神的絕對自

由を求めたのである。

隱逸の風氣が盛んになり始めたこの時代では、現實の政治から逃避するために、自然に歸するということが、元來隱者の正當なスローガンでもあった。しかし社會上の隱逸を尊重する風氣は、すでに隱逸の本質に對する懷疑を產みつつある方向に變化をしていた。この問題に關しては、歷代研究や分析が少なからず行われているから、ここで說明は加えない。

楚の本文の、明哲保身という處世態度に對する批判の重要な社會背景は、ここにあるのである。楚は一步進んで、この問題をとらえ、その病根が當時の求才政策にあることを、剔抉している。これはすなわち政治制度の問題にかかわりをもつことを意味する。

政治に對して、文人が進路を求める情況においては、政府の求才政策が文人の前途を大きく左右する。特に楚の生きた時代、漢から魏、魏から晉へと移向する時代は、政治の力が個人の生死に、直接のかかわりをもった悲劇的な時代であった。楚と似かよった性格と境遇にあった李康に「運命論」という作品がある。(45) この文は、『文選』卷五十三に收められており、『文選』李善注に引く『集林』によれば、李康は「性介立、不能和俗」という世俗と調合することのできない性格を持つ人間であった。彼が言う「運命」とは、この「運命論」の冒頭に

夫治亂運也，窮達命也，貴賤時也。

といったように、個人的な巡り合わせを指す言葉ではなく、人間世界全般の推移にかかわるものと考えている。そして、「吉凶成敗、各以數至。」と言い、聖人が何故聖人と呼ばれるに値するかについては、

聖人所以爲聖者，蓋在乎樂天，知命矣。

と彼は考える。また子夏の言葉「死生有命、富貴在天。」を借りて、次のように推論する。

故道之將行也，命之將貴也……道之將廢也，命之將賤也。豈獨君子恥之而弗爲乎，蓋亦知爲之而弗得矣。

そして、文の最後の部分に、結論として、彼は次のように締括る。

原乎天人之性，核乎邪正之分，權乎禍福之門，終乎榮辱之筭，其昭然矣。故君子舍彼取此，若夫出處不違其時，默語不失其人。天動星廻而辰極猶居其所，璣旋輪轉而衡軸猶執其中。既明且哲，以保其身，貽厥孫謀，以燕翼子者，昔吾先友，嘗從事於斯矣。

以上の内容から見れば、李康は「樂天知命」、「明哲保身」の思想を主張していると理解できる。この文章の制作時期は明らかでないが、一般に、魏の明帝の頃であると推定されている。この時期においては、やや小康を得ていたとはいえ、司馬氏による王朝交替が起こることもすでに目にみえている。従ってこの作品は、このような變動期に處する知識人の姿勢及び意識動向を最も良く反映した文章と考えられる。しかし、孫楚と李康二者の見解は、全く相反しているといえる。相反しているばかりでなく、さらに孫楚が當時の政治家に對して、期待をもっていたことが擧げられる。この期待は、楚の政治に對する積極性をもたらしたのである。また、楚と同時期の文人に好作品が見られない點からしても、楚のこの意識に深くかかわっていると考えられる。(46)

不安定な政權交替の情況下にあって最も生じやすい矛盾とは、方向を見失なった文人士大夫たちの尊君盡忠意識である。漢代以來、忠君の思想方式はすでにこの時代にはそわないものとなっており、文人士大夫にとって重要な

のは、朝代に於ける忠ではなく、自らの臨機應變性によって、自分の地盤を構築することである。そして、この目的を達成するためには、まず先決すべき條件がある。それは見識をもった英雄的「賢明」な執政者にまみえるという期待である。これが可能であれば、有力な求才政策によって、有能な人も埋沒することはないのである。

「賢明」な執政者の登場に對して、楚の表現は充分に強いものがある。前述の「反金人銘」論の發言者は、楚以前の王粲がすでに同性質の文章を成していることを指摘している。粲、楚二者の同題作品の存在は、決して偶然の產物ではない。二人には、この文を除いて、他にも同題の作品が見える。それは「登樓賦」である。本來この時代に於いて、同題の作品があるということは、決して珍しいことではない。(47) しかし、ともに驢馬の鳴き聲を爲す名人である二人の置かれた狀況には、多少の相違點が見られるのである。以下、この事實をもとにして、孫楚の强烈な心境について考察を加えてみたい。

四

王粲の「登樓賦」は、賦の發展過程から見れば、建安時期に於ける抒情小賦の代表作品の一つに數えられ、文學史的にも重要な位置を占めている。この點に關して、すでにかなりの研究資料が言及しているから、ここで說明は加えない。私がここで檢討したいのは、この賦の制作意圖、作品の表現方法と楚の作品との關係についての問題である。

王粲のこの賦は、全體的に强烈な不遇感を發散させている。同時に、全體をおおうのは、壯美な悲秋型文學(48)の情

緒である。元來、中國では、君子登高必賦、[49] つまり情緒を借りて自己の氣持を表現しまた志をあらわすのが、知識人の美德の一つであるとされてきた。王粲のこの賦は、實にこの形態通りの作品である。考證によれば、[48、50] 荆州淪落時期が制作年代にあたる。後人が王粲の文學作品を討論する場合、この賦の作成背景をもって、重要な分岐點としている。粲が荆州を離れて、曹操の幕下に迎えられた後、作品の風格に變化が見られる。それはつまり清憤から世俗に近いような感覺に陷入ったのではあるまいか。この變化は、後の王粲作品に對する評價について、かなりの損傷を負わせているばかりではなく、甚だしくは、王粲の人格についての懷疑さえ生じさせている。實際に見れば、この種の變化は單に表面上のものにすぎない。王粲本人の立場から見れば、匡世濟民の大志は、一貫にして變りはないのである。[50] 問題は粲の文風の變化ではなく、粲の遭遇にあるといえよう。荆州時期の不遇と曹操幕下で重用されたこと、これは王粲の人生に與えた大きな轉機であった。「登樓賦」中の意志が悲憤不安であればあるほど、「從軍詩」[51] 中に表現したあの自己滿足感がよく理解されるのである。この時代に於ける文人は、「文學」、「文章」[52] に對する意味が曖昧であった。文學功用は、やはり政治目的の枠からとび出せない。自己個人の政治社會に對する一種の使命感が、無意識に創作態度上に影響するであろう。自己の政治地盤が少しでも安定するならば、文學創作の氣風が强まり、「非正統的」な意味の文學作品の出現は疑う必要もないであろう。「賢君」との出會いによって、王粲の政治的生涯と文學創造環境に與えた影響の大きさは、孫楚の場合、いったいどのような意義があったのであろうか。そこにもちろん「賢君」曹操の存在を忘れることはできない。

孫楚の「登樓賦」は、その制作時期は不明であるけれども、仔細に檢討すれば全體をおおう情緒なり、作者の

創作意慾なりが見て取れるであろう。

粲と楚二者の作品の內容を比較すれば、「登樓」の目的に於いて、大きな相違點が見られる。その違いは、粲の作品中の「登茲樓以四望兮、聊暇日以銷憂。」、孫の作品の始めの部分に「從明王以登極、聊暇日以娛心。」の句に於いて、すでに明白である。孫楚の作に於けるこの句の比重の大きさは、この作品全體に通じる氣勢をも感じさせる。王粲の作品の場合、文中を巡る「兮」字の多用もあって、楚辭的な語感の表現が多く醸し出されている。兩者の作品は、おのずと趣を異にしていることがわかる。

兩者は均しく樓上から望遠する風景の內容を描寫している。美麗な風景を、一方は「雖信美而非吾土兮、曾何足以少留」と感嘆し、一方はこのような嘆かわしい表現は見られない。かわって昇平景象[53]を描寫している。これは、兩者の創作時に於ける政治的立場、時代背景の相違に起因するものであろう。總體的に見て、兩者の作には相違點が少なくはない。しかし創作當時の志向は、一致するものであると考えられる。この點に關しては、王粲個人の意志の一貫性に既に論及したので理解できるであろう。知識人たる人生の最も理想とするものは、匡世濟民の大志を完成させる以外の何であろうか。この目的達成には、文人各々の立場の違い、時代の違い、取った方法の違いに差異があるのは當然である。それは亂世に身を置いた、不遇の王粲が全身の熱血を打ち込んだ作品には違いない。時代背景をとっても、楚の場合は、前述のように、政治上では暫定的な統一の時代であったことは、「登樓賦」が描寫するところの昇平世界である。もちろん、この暫定的な平穩さの後には、各種の危機なり、知識人が對面した問題が、隱されていたであろう。また、それは實際の亂世より更に自己を迷失する方向でもある。

孫楚の生きた時代においては、知識人にとって、仕隱進退の問題は特別顯著であった。本來知識人の仕宦については、正當な求才の策試が行われた。しかし漢以來選考制度はしばしば不正を生じ、士人にとって公平な競爭の機會はなかった。[54] こういった求才問題が知識人に與えた不安は、決して小さくはなかった。このことを反映して、楚の「龍見武庫井上言」中に、次のような發言が見られる。

（前略）夫龍或俯鱗潛于重泉，或仰攀雲漢游乎蒼昊，而今蟠于坎井，同于蛙蝦者，豈獨管庫之士或有隱伏，斯役之賢沒於行伍？[55] 故龍見光景，有所感悟。願陛下赦小過，舉賢才，垂夢於傅巖，望想於渭濱，修學官，起淹滯，申命公卿，舉獨行君子可惇風厲俗者，又舉亮拔秀異之才，可以撥煩理難矯世抗言者，無繫世族，必先逸賤。

（以下略）

また彼の「奏論求才」の文中にもこのような批判が見られる。

當今世子繁多，略以萬計。當思官少才多，無地以處。秀才自別是一種仕官，非若漢代取人之例也。假若秀才荅五問可稱孝廉，荅一策能通，此乃雕蟲小道，何關治功，得人以此，求才徒虛語耳。

孫楚は當時の求才制度の缺陷と不公平を批判しながら、當時の士人のやるせない不安な心情を述べている。當時の求才が根據とする九品中正制度についても、さして納得できるものではなかったと考えている。漢代から魏晉までの儒家意識が濃厚な縱の君臣父子關係から、一轉して貴族豪族中心の横の關係への發展情況[56]は、實際上九品中正制度の成立と密切な關係にあると考えられる。因って、歷史上、この制度に對する批判は、斷たれたことはなかった。[57]

漢以來、各種の試驗制度はあったけれども、漢末の大亂を經てから、實際に添わなくなったのが實狀であった。

このような時期にあって、曹操の求才令の出現は、當時においては大膽且つ斬新な創擧であるといわねばならないであろう。[58] それは自然に、求才方式を活發にせしめ、更にその範圍をも擴大させたことは確定できる。東漢以來、儒家思想を中心としたのが標準的人物鑑定であった。しかし、曹操は「唯才是擧」の原則を提出して、政治上の治國、用兵の才を特別强調している。正始以後、人物個性の强調が、この時期の思想と人物鑑定に鮮明な特色をもたらしている。道德だけの原則から離れたことは、曹操の影響を見過すことはできない。曹操の「唯才是擧」の原則とは、政治上の人材の直接的選用であったとはいえ、同時に哲學、文學、美學の發展に及ぶまでの劃期的な大きな影響をもたらした。[59]

孫楚と同時代の人々が、不安定な政局や偏狹な九品中正制度の束縛の渦の中で、曹操の時代に魅せられたのは自然の道理であろう。[60] 楚の內心に於ける「賢君」の追求は、政治制度に對する不滿を述べた「奏廢九品爲大小中正」文中における次のような內容から理解できる。

九品漢氏本無、班固著漢書序、先往代賢智以九條、此蓋記鬼錄次第耳。而陳群依之以品生人。又魏武拔奇、決于胸臆、收人才不問階次、豈賴九品而後得人。今可令長守爲大小中正、各自品其編戶也。

また、その賢君の見本として、曹操とその時代への憧憬が濃厚であることが考えられる。王粲一生の遭遇にしても、楚は知らぬはずはない。それで楚の「登樓賦」は、粲の作と全篇を流れる情緒を異にするが、內心では、粲の作が本來もつ旨に沿いながら、自分の志を暗示している。また、「明王」[61]という語を使用しているのは、曹操を相當意識していると思われる。楚の創作目的を見れば、文の最後の部分に「百僚雲集，促坐華臺」の場で、「談三墳而詠五

典，釋聖哲之所裁」が示したように、「娛心」以外に王粲と同様な志向を抱いていることが知られよう。同時に、「反金人銘」の制作を考えて見れば、それが王粲「反金人贊」を相當強く意識したものであることが推察できる。

五

以上、文人の仕隱態度、政治上の求才制度、賢君に對する期待等、現實の諸問題について述べて見た。ここでこの外「反金人銘」の文章に見える重要な主題、すなわち「立言」の問題について、檢討してみたい。これは、現實の政治問題から、文學價値の問題までかかわると考えられる。

「反金人銘」の本文に、「多言」、「少言」「言立」等の直接的表現も見えるが、その反面、間接的な表現も少くはない。終始「言」の問題を、さまざまな角度からとりあげ、述べている。「言」の解釋は、個々の立場や角度が違うから、それぞれ深重な意義を備えている。楚が强調するところの「言」、士人の立場から見れば、單なる口先の語言ではなく、語言文字によって書かれた「文章」をも包括している。もう少し具體的に言うならば、それは士人が發表した政論の文字ともいえよう。この文章の功用とは、一方では積極的に政策を提供する內容であり、一方では政治に對する批判作用である。爲政者の立場では、この「言」すなわち「諫言」の意義であろうし、若し現代語ならば「言論の自由」の意義をもつと考えられよう。(62)

中國史に於ける「言論の自由」の追求は、古より各種の形態と各種の角度から表現されている。かつて知識人たちの吶喊した時代は幾年月續いたであろうか。各王朝の交替時期に、一體どれだけの犧牲者があったであろうか。

「言論無罪」は中國に於いて、曾って眞に實行されたことはない。文人個人の前途と政治が密切に關係する情況下において、文人の文學觀は現實の政治に伴って否應なく波動と起伏を強いられたことであろう。文學發展の結果から見た場合、「言論自由」の主張とは、正に文人にとって自己の思想表現の主要な課題と手段であった。中國では、古より專業の文人はいない。(63) それだけに、文學の功用とは、決って政治、社會、道德等の範圍から脱却することはできなかったのである。前述「承旨則順、忤意則違」、「逆龍之鱗、必陷斯機」、「括囊無咎、乃免誅夷」の情況下、「愼言」哲學處世態度が流行したけれども、これは必然的結果である。「愼言」から「愼文」までに發展し、その結果は、のちにおいて玄學と文學に現われている。(64) そして、楚がここで强調する「夫唯言立、乃可長久」とは、當時の文學價値に對する高い成就の見解である。

曹丕の「文章乃經國之大業、不朽之盛事。」の發言以來、一般に後人にはこれより文學の自覺時代の開始だと公認されている感がある。實際、この文章の宗旨は、一家言の重要性を强調したにすぎない。このことは、すでに研究によって指摘されている。(65) 曹丕の文章不朽說は實は漢末の極端に不安な動亂期に於ける一種の覺醒であったし、傳統的三不朽意義に對する强調の重複にすぎないのである。(66)

孫楚は、魏の時代に生まれ、正始から太康までの時代に自分の人生のもっとも重要な時期を送った。この時期は、文學發展史上では、駢、散文體が分立する轉換期と言われている。(67) この分立現象の最大の原因は、やはり政治であるといわねばならない。

この時期の政治情況は、まさに漢帝國崩壞以後の各種制度及び政策が不安定な時期であった。孫楚は、このよ

うな時代背景にあって、立言の不朽性を強調しているが、これは執政者に對する不信感であるし、漢末以來の思想潮流の繼續でもあろう。「明哲保身」の消極的思想が流行する世に於いて、楚は「立言」の含む正統的意義の再確立を願望したのである。同時にそれは知識人の文學目的に對するひずみ傾向を正すものであった。

「愼言」哲學の原則とは、文學發展の方向を政治的方向から脱却させ得るものである。知識人が才能を發揮する政治的地盤を失なっている以上、その他の才能を伸ばせる方向に向かうというのが、自然であろう。現代の文學觀からすれば、文學を政治的束縛から解放するのは、それほど困難ではないかもしれない。しかし、楚の生存した時代、つまり儒家中心の文學と政治の關係がある背景下では、やはりそれが知識人意識をリードした主流であったはずである。[68] 竹林七賢の出現が當時においては一つの異變だとはいっても、結局その出發點は政治的理由にほかならない。知識人の文學に對する見解の原點は、あくまでも現實の政治問題からかけ離れることはできないのである。少なくとも陶淵明の出現までそうであったといえよう。[69] 中國史に於いて、眞の隱者はいなかったという情況にあって、この時の隱遁思想は極めて未成熟であった。

孫楚個人についても莊子について「殆矯其情、近失自然。」[70] の批判があるし、楚が書いた管仲、白起、韓信、樂毅等人物贊の作品から、楚の積極的な政治參加の願望が理解できる。

立言の不朽性を強調することは、事實上知識人の政治參加の義務を強調することと同樣である。そして、これこそ楚が「反金人銘」を書いた最大の意圖であるといっても過言ではあるまい。それだけに、この作品は、文學、哲學及び政治發展史上、極めて重要な意義をもっているといえよう。

六

以上、孫楚に關する初歩的な考察を試みた。「反金人銘」の文章を讀めば、孫楚の生存した時代の總體的な情況、或いは當時の知識人が直面した各種政治社會上の現實問題について、多面的な理解ができる。

孫楚個人は、政治的地位において、何ら顯著な人物ではない。文學史上に於いても、「零雨詩」以外は、特別に知られるような佳作が残っているわけではない。しかし、前述したように、孫楚の生きた時代とは、文學、藝術のみならず、更に政治社會においても、一つの大きな分岐點にあったし、總體的潮流が次第に異變を生みつつある時期にあった。孫楚個人の思想意識を檢討し、その生涯を見據えることによって、その時代前後の各種の現象と問題を把握することが可能である。

中國では、常に政治的影響によって、すべての人文活動が発展する。また、文學史に於ける文人の地位を語る場にも、かならずその政治社會との關係がみられる。知識人自身の中心課題とは、ただの「文士」のみに止らず、永遠に政治をその原點にしている。政治體制の盛衰と交替は、知識人の政治に對する發言力にとっても、政情にそった變化が强いられたのである。單に文學の形態から見ても、中國文學は山水、田園、隱逸などの分野がある。これは、政治的問題の內面から育まれた產物といえる。

約四百年にわたる魏晉南北朝の文學は、一般に貴族文學とされている。建安風骨の氣風をもつ曹魏時代より、知識人の文學をもって、文學形態の基礎にすることを建立している。このような時代背景にあって曹丕は典論の文章

不朽説において、辭賦文學とは別に一家言を成すことを强調している。名聲の不朽性を勝ち取ることに注目したのが、三不朽説の意味である。文章が政治敎化に對して、あるべき役割をもつことによって、その不朽性を成立させるのである。正始時代になれば、知識人の發言は抑制された。その結果、知識人は社會の各種の不安や矛盾に對して、現實逃避の方向に自己の文學意識を向けなければならなかった。太康時代に至れば、正始時代の氣風は一層進み、基本的に文學作品の制作は、貴族とその周圍の文人たちに集中することになる。一時の政治的安定は、少なからず詩人を生み出したけれども、文人たちが政治的抱負を伸展できない情況下において、文學の內容も現實社會を離脱してしまった。その上、表現の形式も技巧重視の傾向に陷り、修辭主義が文學發展の主流になってしまった。更に東晉時代に至ると、老莊思想に基く玄言詩の隆盛をみることになる。

このような時代に、中國文學の內容が多元的な方向に發展し、極めて豐富な成果をもたらしているのは否定できない。しかし、のちに宮體文學の流行をみるに至っては、貴族社會における文學の頽廢であると考えられる。同時に「原道」「宗經」を提唱した『文心雕龍』の存在もまた時風に對する產物ということもできる。

正始から太康、元康に至る時代は、孫楚の生涯にとって、極めて重要な時期である。太康以來、修辭文學への關心は、文人の政治意識によるものであると考えられる。楚は、當時の知識人の政治に對する欺瞞的態度に不滿を表明している。文人たちの文學價値觀の變化に、立言不朽を强調することは、政治ばかりを問題にしたのではない。事實、楚が主張したのは、文學が藝術とは別の次元にあること、そして政治に對して文學の持つべき役割を再確認しながら、知識人の社會的責任の問題を提起したことである。これらが極めて解決し難い問題であることは、楚の

生存した時代も現在も、基本的に變ることはない。魏晋の多難な時代にあって、楚の主張は小さな警鐘であった、しかし後の中國文學發展史からみれば、それは文學と政治の根幹に關わる決して無視できない普遍的で重要な問題提起であったといえる。

註

(1) 見『世說新語』排調篇。
(2) 見『晉書』卷五十六。
(3) 見『管錐篇』全上古三代秦漢三國六朝文第一〇一條。
(4) 見新潮社『新潮日本文學辭典』夏目漱石條。
(5) 見『山西歷代詩人詩選』孫楚の部分。
(6) 見平凡社『漢魏六朝唐宋散文選』年表。
(7) 傳見『晉書』卷三十三。
(8) 見『文選』卷四十三。
(9) 符、孫二氏の名前は文字の異同が見られる。本傳校勘記參照。
(10) 傳見『三國志』卷五十一。
(11) 見『資治通鑑』卷七十八。
(12) 事見『晉書』石苞傳。
(13) 見『三國志』卷十四。
(14) 事見『三國志』卷十四裴注引「資別傳」。
(15) 見『三國志』卷十四。
(16) 見『三國志』卷十四。
(17) 見『三國志』卷四。
(18) 見『三國志』卷十四孫資別傳裴注。
(19) 『三國志』孫資傳評曰：（前略）劉放文翰，孫資勤愼，並管喉舌，權聞當時，雅亮非體，是故譏諛之聲，每過其實也。
(20) 見『世說』文學篇。
(21) 見『世說』傷逝篇。
(22) 『晉書』楚本傳に彼の自稱「狂夫」の記錄か見える。
(23) 王仲犖氏『魏晉南北朝史』參照。
(24) 見『詩品』卷中。
(25) 零雨詩の內容は以下のようである。「晨風飄歧路、零雨被秋草。傾城遠追送、餞我千里道。三命皆有極咄、嗟安可保。莫大於殤子、彭祖猶爲大。吉凶如糾纏、憂喜相紛擾。天地爲我爐、萬物一何小。達人垂大觀、誠此苦不早。乖離卽長衢、惆悵盈懷抱。孰能察其心、鑒之以蒼昊。齊契在今朝、守之與偕老。」詩名は「征西官屬送於陟陽候作詩一首」。征西將軍の扶風王司馬駿の屬僚が、孫楚の舊友であったので、陟陽の駅亭で旅立ちを見送られたとき

に作つたものである。

(26) 見『文選』巻二十祖餞。

(27) 見『義門讀書記』第二巻。

(28) 孫指孫綽、許指許詢。ここで注意すべきは、何氏が指摘した楚と綽、詢との違いである。『詩品』に「孫、許、桓、庾諸公詩、皆平典似道德論、建安風力盡矣、逮義熙謝益壽斐然繼作。」がある。又、『世說』文學篇注引『續晉陽秋』曰：「詢有才藻、善屬文。自司馬相如、王褒、揚雄諸賢、世尚賦頌、皆體則詩騷、傍綜百家之言。及至建安、而詩章大盛、逮乎西朝之末、潘陸之徒、雖時有質文、而宗歸不異也。正始中、王弼、何晏好莊老玄勝之談、而世遂貴焉。至過江、佛理尤盛、故郭璞五言、始會合道家之言而韻之。詢及太原孫綽、轉相祖尚。又加以釋氏三世之辭。而詩騷之體盡矣。詢、綽並爲一時文宗、自此作者悉體之。至義熙中、謝混始改。」

(29) 見『古詩源』巻七。

(30) 見『漢魏六朝百三家集題辭』孫子荆集。

(31) 『藝文類聚』には「晨風」から「千里道」までまず收め、そのあとの部分を省略し、「乖離卽長衢、惆悵盈懷抱。」の二句だけ摘錄してある。この詩は巻二十九「別」に收錄され、送別にふさわしい抒情的な描寫部分を摘錄したと思われる。

(32) 孫綽については、李文初氏『東晉詩人孫綽考議』がある（文史第二十八輯）

(33) 劉大杰『魏晉思想論』の「魏晉時代的人生觀」參照。

(34) 湯錫予『魏晉玄學論稿』參照。

(35) 文選注參照。詩中「吉凶如糾纆」、「憂喜相紛擾」、「天地爲我爐」、「達人垂大觀」などの句は、賈誼の「鵩鳥賦」とかかわりがある。

(36) 見『文心雕龍』時序篇。

(37) 見『藝文類聚』巻十九、人部三、言語。また『全晉文』巻六十、『御覽』五百九十に收められている。

(38) 見『說苑』巻十。

(39) 見『全後漢文』巻九十一。

(40) 『藝文類聚』では「我讀」から「口尤」までが省略されている。

(41) 『藝文類聚』作「立言」。「乃可長久」作「名乃長久」。「自拘」から「叉手」までが省略されている。

(42) 王瑤『中古文學思想』參照。

(43) 吉川忠夫『六朝精神史研究』序章「六朝士大夫の精神生活」參照。

(44) 橋本循『中國文學と隱遁思想』（立命館學叢）參照。また

その『中國文學思想管見』にも見える。

(45) 文見『文選』卷五十三。

(46) 鈴木修次『漢魏詩の研究』參照。

(47) 王瑤『中古文學風貌』參照。

(48) 新海「王粲の『登樓賦』について」。(國學院雜誌68卷一月號) 參照。

(49) 宇野直人「漢代の詩歌における登高遠望形象の動向」(神戸大學中國文學研究第十一期) 參照。

(50) 甲斐勝二「王粲の詩賦とその志について」(『中國文學論集』第十五號) 參照。

(51) 詩見逯欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』。この詩は曹操幕下での作品である。詩の冒頭の「從軍有苦樂、但問所從誰。所從神且武、焉得久勞師。(以下略)」は、曹操を意識した描寫であると考られる。

(52) このことについて、興膳宏「六朝期における文學觀の展開」(『中國文學理論』收錄) を參照。

(53) 昇平景象についての描寫は以下のようである。「(前略) 鳴鳩拂羽于桑榆、游鳧濯翅于素波、牧豎吟嘯於阡陌、舟人鼓枻而揚歌、營巷基峙、列宅萬區、黎民布野、商旅充衢。(以下略)」

(54) 橋本循「後漢の選擧と漢魏の際の文學思想」(高瀨博士還曆記念支那學論叢昭和三年十二月) 參照。

(55) この描寫は曹操のことを暗示している。

(56) 森三樹三郎『中國思想史』下「六朝時代の思想」參照。

(57) 宮崎市定『九品官人法の研究』を參照。

(58) 單に歴史行事から見れば、「創擧」とはいえないかもしれないが、實際にその性質內容から見ると、やはり「創擧」と考えるべきであろう。

(59) 李澤厚、劉綱紀『中國美學史』第三編、第三章參照。

(60) 例としてあげるなら陸機もその一人である。參考高橋和巳「陸機の傳記とその文學」參照。

(61) 「明王」には、舊時社神の封號と賢聖の君の二通りの意味がある。ここは『尚書』の說命の「明王奉若天道、建邦設都」による賢聖君王をさしている。

(62) 徐復觀「中國知識分子的歴史性格及其歴史的命運」(「民主評論」第五卷第八期) 參照。

(63) 蔣寅「關于中國古代文章學理論體系」(「文學遺產」一九八六年第六期) 參照。

(64) 王瑤『中古文學思想』の「文論の發展」篇。

(65) 岡村繁「曹丕の『典論』論文について」(支那學研究第二四、二五合併號) 參照。

(66) 古川末喜「建安三國文學思想の新動向」(日本中國學會報

第四十集）。

（67）清水茂「正始の文章」（「小尾博士古稀記念中國學論集」所收）參照。

（68）蘇紹興『兩晉南朝的士族』參照。

（69）李文初『陶淵明略論』參照。

（70）文見全晉文卷六十「莊周贊」、「管仲贊」、「白起贊」、「韓信贊」、「樂毅贊」。